

会員新刊紹介

堀田あけみ・村井宏栄著

『ついスマホに頼ってしまう』

人のための日本語入門

大学で「日本語表現」の講義をしていると、毎年「どうしたら文章力は伸びますか?」「語彙力を向上させるためには何をすれば良いですか?」といった類の相談を受ける。本書は、そんな悩みを抱える学生、そして、そんな学生たちを導く教員にお薦めしたい一冊だ。

本書の特長は、「著者と学生のやりとり」や「著者自身の体験談」をきっかけに問題提起がなされ、その解決策が軽快な文体で記されている点にある。実際の使用場面が豊富に示されているため、「なぜ、その表現が不適切なのか」、「不適切となる原因は何か」、「何を心がければ適切な表現につながるのか」を実感しながら理解することができる。教員側の立場で読むと、学生の「一見不可解な誤りや言い分」の理由が見えてくる点でも面白い。

以下、全三章からなる本書の内容を章ごとに紹介する。
「第一章 辞書と付き合う」では、辞書、とりわけ「紙

の辞書」でことばを調べることの重要性が説かれている。スマートフォン の普及により、インターネット上でことばの意味を「何となく」把握することは容易になった。しかし、複数の辞書を引き比べることで見えてくる気づきや、ページをめくる動作を通して得られる「意外な発見」は、日本語を「豊かに語る（ii 頁）」上でとても大切である。「共闘」、「揶揄する」の使用範囲を巡る著者と学生との軽妙なやりとりから、辞書を引くことの醍醐味が改めて感じられた。

「第二章 語彙を増やそう」では、頭の中にあることばを使用場面ごとに分類し整理することの必要性、語種（和語・漢語・外来語）による意味やニュアンスの差、効率的に語彙を増やす方法などが記されている。「語彙を増やしたい」と言う学生には「知っている単語を増やしたい」あるいは「ちよつと難しい語も使えるようになる」という傾向が強いように思われる。しかし、単に語の意味を知っているだけでは不十分である。本書では「場面に応じて最適な語を導く力」を身につけられるよう、多くの例が示され、「使える語彙」を増やすための指南がなされている。

「第三章 敬語に強くなる」では、文化庁による「敬語の指針」で示されている五種の敬語について、項目別

に解説がされている。出現頻度が高い形式や語彙については「問」が設けられており、読み手が自身の敬語の運用能力を確認しながら読み進められる構成となっている。敬語としての正しさを説くだけでなく、陥りがちな不適切な表現例や、実際に敬語を話す場面で重要となる「クッション言葉」、相手に配慮した「メール文の書き方」にも言及があり、学生にとって「即戦力」となる日本語の知識・技術がまとめられている。

スラスラと気軽に読み進められる一方で、学生の立場から教員の立場からも「そうだったのか!」という気づきが得られる本書。今度、「どうしたら文章力は伸びますか?」と問われたら、本書を薦めた上で、学生から感想を聞いてみたい。

〈二〇二二年七月二〇日刊、ナカニシヤ出版、

四六判、一六〇頁、一八〇〇円＋税〉

(原美築・愛知淑徳大学講師)

渡部泰明・平野多恵・出口智之・

田中洋美・仲島ひとみ著

『国語をめぐる冒険』

(岩波ジュニア新書)

令和四年度の高校一年生は、「現代の国語」と「言語文化」という新科目のもとで国語を学んでいる。高校の学習指導要領には様々な意見があるが、本書は、そういった教育課程の議論以前に、国語という教科そのものの意義について、五人の著者が具体例を盛り込みながら論じたものだ。

「はじめに」(渡部泰明)において、「国語は、人間として成長することと深く関わる科目」(iv頁)であると述べられるところから本書は始まる。

「第一章 国語は冒険の旅だ」(渡部泰明)では、『伊勢物語』第九段「東下り」の「男」の冒険譚が語られる。異世界である三河国八橋に咲き誇るカキツバタを征服するため、旅の一行がとった手段が和歌であった。「不可解な物事が突然出現してびっくりしたとしても、言葉で表すことができれば、理解可能な範囲に収まり、気持ちも落ち着く」(二十三頁)く。それが、言葉の力だという。

「第二章 言葉で心を知る」（平野多恵）は、「占」や「心」が含み持つ意味から、表に見えない心の中を明らかにするのが「うらない」だと説く。その上で、室町時代の、くじ形式の和歌占いや、江戸時代の『百人一首倭歌占^{うたうら}』などを紹介する。古典に親しむための言語活動にも活かそうだ。

「第三章 他者が見えると、自分も見える」（出口智之）は、「書かれていないことに着目して考えてゆく内容」（九十二頁）を〈裏の物語〉と呼ぶ。「走れメロス」「山月記」を例に、〈裏の物語〉に迫る面白さを説き、国語で小説を学ぶ意義をも論じる。

「第四章 言葉で伝え合う」（田中洋美）は、「書くこと」に向き合う。「わかりやすい」と思って選んだ言葉が、相手に届かない」（一四〇頁）、そんな困難さから本章は出発する。続いて、書くことが苦手な生徒を意識した指導のあり方が具体的に紹介されていく。

「第五章 言葉の地図を手にいれる」（仲島ひとみ）は、教科名が「日本語」ではなく「国語」であるのはなぜかと問う。「国語」の成立過程には、暴力的な歴史が潜んでいることにも触れる。「国語」そのものを疑い、「枠組みの外から見ること」（二二〇頁）の重要性を訴えて、本書を結ぶ。

本書は、教育課程について論じたものではないと述べたが、教育課程を論じる際にも資するところが大きい。本編以外にも、コラムやオススメの本（推薦図書）といったページもあり、参考になる。

二〇二二年八月二十日刊、岩波書店、新書判、一三八頁、

八八〇円＋税

（加藤直志・名古屋大学教育学部附属中・高等学校教諭）

宇野田尚哉・坪井秀人編著

『対抗文化史』

冷戦期日本の表現と運動』

対抗文化という言葉は人々に何を思い起こさせるのか。私の場合、二〇二一年八月の終わり、常滑で催されたHIPHOPイベント『NAMIMONOGATARI』をめぐる騒動が想起される。詳細は端折るが、この騒動は、対抗文化の可能性と不可能性——スタイル、ストリート、資本主義、法、管理、陶酔、知性、欲望／欲求、有象無象、集合、そして、革命？等々を抱え込んでいる。対抗文化をお行儀よく言祝ぐ学徒にこそ、「マルチチュード」や「動物化」などの議論を久しぶりに思い起こし膝突き合わせてもらいたい、そのような出来事である。

しかしながら、本書が捉える対抗文化は、ここで持ち出した例とは些か異なる様相を帯びている。無論、その所以は「冷戦期日本」の捉え方にある。本書の企図についての思索は、宇野田尚哉「序論」に詳細に語られているが、あえて強引にまとめるならば、日本「一国」に閉じられることのない、東アジアという枠において捉え直された冷戦期日本の抵抗文化を議論することが、本書の

目論みだと言えよう。

本書は、一九四五～五〇年代、六〇～七〇年代、八〇年代の区分に基づく三部構成で編まれ、小説、詩、童話、批評、新聞、映画、絵画、学生運動などが一五編の論文によって論じられている。文学、映画学、歴史学、社会学の分野で活躍する著者たちの濃密な議論が展開される（本書は日文研の共同研究の成果である）、五木寛之論をはじめ気になる論考が揃う。その一例として、寺山修司を論じる坪井秀人の論考（九章）に触れておこう。坪井は、対歴史的な寺山の表現や故郷の位置付けなどを通じて、対抗文化にとって重要な空間であるストリート問い直す。坪井の批評性の肝要は、現在の問題を寺山の表現へと一足飛びに接続させる筆致にある。それ故に、寺山を介して練り上げられた坪井の批評性を、本書の目論みとは無関係に思われる別のストリート文化——例えば、寺山と同時代であればつびえんどの都市表象、冷戦期以降であればNGO[®]と裏原宿、野村訓市たちの表現等々と闘わせたくなる。歴史の陳列棚から冷戦期対抗文化を引き摺り出し、書名に刻まれた「史」を決定論的で線形的時間から解放しよう——坪井の言葉は、そう我々を誘うかのようだ。だとすれば、坪井の論文には理論がある。ヴァルター・ベンヤミンを知る我々にとって、

このような触、発を生じさせるものが、理論の二つ名であることは明白である。坪井論文に限らず、本書のそこそこにかかる批評性＝理論が潜在するはずだ。

また、論文とは別に収められた大塚英志へのインタビューも目を引く。ここで語られるのは、大塚の十八番たるアカデミズム批判である。これを掲載したことによって、本書にはある種のバランスがもたらされているが、それは間違いなく編者の慧眼によるものである。

二〇二二年一〇月一日、大阪大学出版会、A5判、三七〇頁、

五五〇〇円＋税

(水川敬章・神奈川大学准教授)

佐久間秀範・近本謙介・本井牧子編

『玄奘三蔵

新たなる玄奘像をもとめて』

本書は玄奘についての論文集である。中国唐代の高僧である玄奘は、長安からインドまで求法の旅に出て、多くの仏典や仏像などを持ち帰った。帰唐後には、請来した仏典の漢訳に尽力し、その教学は法相宗の開祖とされる慈恩大師基など多くの弟子たちに伝えられた。また、玄奘の旅行中の見聞は『大唐西域記』にまとめられ、死後には『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』などの伝記も複数作成されている。それらは玄奘についての根本資料として重んじられ、奈良時代には日本にも伝えられている。そして、それらの資料に基づき、日本でも玄奘の伝承は語られた。たとえば、『今昔物語集』などにはその説話が収められ、また、鎌倉時代には十二巻に及ぶ大作『玄奘三蔵絵』が作成されている。このように中国だけでなく日本の仏教や文化にも大きな影響を与えた人物であるため、玄奘の実像や伝承をめぐっては多くの研究がなされている。本書は副題に示されるように、それらの研究の上に「新たなる玄奘像をもとめて」企画されたものである。

る。

本書は二〇一五年十二月に行われた「玄奘フォーラム」をもとに発展させたもので、十六本の論文で構成されている。その内容は大きく二部にわかれている。第一部は「玄奘の足跡と思想」と題し、玄奘の事績や思想の変遷とその後世への影響について検討する内容となっている。第二部は「玄奘をめぐる言説・図像」と題して、玄奘に関する文学や絵画の分析をとおして、その伝承の変遷を検討する論文が収められている。仏教学・考古学・文学・美術史など多分野の研究者の論文が収録されており、領域横断的な玄奘に関する最新の研究成果とさえよう。なお、冒頭にカラーで地図や写真・図が収められ、各論文のなかでも適宜資料写真が示されており、イメージが伝わるよう工夫がなされている。

以上のように全体をとおして明確な議論の枠組みがあるため、冒頭から順に頁をめくるべきであろうが、個々の論文は独立したものとして読むこともできる。以下に、特に日本文学に関わるものをあげる。第一部第六章「玄奘門弟道昭和尙に関する文献上の一考察」（ステフェン・デル）では、玄奘の弟子で日本にその教えを伝えたとされる道昭のイメージを『続日本紀』『日本霊異記』『今昔物語集』をはじめとする多くの資料の分析をもと

に提示する。第二部は玄奘のイメージを問題としているため全体的に文学研究とも関わるが、なかでも第五章「慈恩大師基をめぐる唱導―東大寺図書館蔵『如意鈔』を中心に」（本井牧子）では中世興福寺の高僧貞慶の唱導文献をとりあげ、南都復興期の玄奘イメージとその語りの意義について論じる。第二部第六章から第九章はいずれも『玄奘三蔵絵』をめぐる論文であるが、第七章「『玄奘三蔵絵』の成立―詞書筆者資料を基点として」（落合博志）は新出資料をもとに詞書筆者を同定し、絵巻の企画・制作主体について論じる。第九章「『玄奘三蔵絵』の構造と構想―興福寺における宗の論理と『春日権現験記絵』との相関」（近本謙介）では、『玄奘三蔵絵』の詞書の分析から巡礼と往生の記としての構想を読みとり、同時期に興福寺で作成された説話絵巻『春日権現験記絵』と対比して分析し、それらが制作され伝えられた意義を考察する。

（二〇二一年二月二八日刊、勉誠社、A5判、五九二頁、

一二〇〇〇円＋税）

（三好俊徳・佛教大学准教授）

坪井秀人編

『戦後日本の傷跡』

本書は、二〇二〇～二一年度にわたって国際日本文化研究センターで行われた共同研究会「戦後日本の傷跡」(代表：坪井秀人、宇野田尚哉)の研究成果をまとめたものである。戦後日本文化を対象とした共同研究会「戦後日本文化再考」(二〇一五～一七年度)、「東アジア冷戦下の日本における社会運動と文化生産」(二〇一九年度)に続く、三つ目の戦後日本文化研究の決算といえる。多岐にわたる本書の内容は以下の通りである。副題は省略した。

第一部 戦争の傷跡とアジアの中の戦後

傷痕軍人の語る「傷跡」(市川遥)

生者を傷つける死者との回路(葉曉瑤)

宮尾登美子の満州体験と帝国の傷跡(ニコラス・ラン

ブレクト)

台湾先住民を日本人にさせる殖民暴力とその傷跡の分

有(中村平)

移動者たちの「在日朝鮮人文学」(宋惠媛)

「留用」と「引揚げ」(解放)

在韓被爆者支援と文学(川口隆行)

第二部 傷の記憶と表象

脚本家水木洋子と戦後社会派映画再考(キツニツク・

ラウリ)

母の死とオリンピック(鳥羽耕史)

レイプの位相と男性セクシュアリティ(高榮蘭)

戦争記憶を民話として継承するということ(高畑早希)

完結する物語、完結しない声(田村美由紀)

第三部 戦後民主主義——運動と傷跡

中野重治「雨の降る品川駅」の同時代史(黒川伊織)

「カスバ」とよばれた街(石川巧)

〈無力なイエス〉と戦後キリスト教界(増田斎)

全共闘運動の傷跡(小杉亮子)

日本特殊論とトランプ政治(辛島理人)

第四部 ジェンダー、生政治と傷跡

傷を重ねる(奥村華子)

森崎和江『からゆきさん』(佐藤泉)

敗戦のトラウマと性的不能、あるいはエロティックな

戦争(光石亜由美)

サリドマイド事件の傷跡(ホワニシャン・アストギク)

妻の崩壊(坪井秀人)

戦後日本の「ケアの危機」(飯田祐子)

社会距離という傷跡（美馬達哉）

傷痕は、癒されていく途中の傷であり、いまだ癒されていない傷である。戦後において「傷」として刻印された過去の出来事を想起させる「跡」は、傷そのものではないがゆえに、忘れ去られつつある過去の残骸になる。同時に、跡として確かに存する以上、決して忘れ去られることのない過去をくつきりと浮上させる。揺れ動きつつ増幅する傷跡の概念は、各論者においてダイナミックに変奏させられている。たとえば、傷と傷跡の交差性（田村美由紀）、傷跡とそれと向き合う主体の関係性（川口隆行）への指摘から、傷跡という概念が戦後研究にいかに関与しているのかがわかる。また第一部が示すように、戦後日本の傷跡は決してニッポンという一国に閉じられたものではないということまで考えると、「傷跡」とはまさに生々しく「空間と時間とがそこで交錯するもの」（序論）なのだ。

本書を通じて、今現在の戦後研究の達成点を確認することができる。

（二〇二二年二月二十八日刊、臨川書店、A5判、

三七六頁、四五〇〇円＋税）

（李承俊・世宗大学講師）

中根千絵・森田貴之編

『奈良絵本『太平記』の世界

永青文庫所蔵『絵入太平記』

全挿絵影印ならびに研究

本書は、軍記物語『太平記』を奈良絵本化した『絵入太平記』を紹介するものである。室町末期から江戸前期には、絵入りの冊子写本である奈良絵本が流行した。奈良絵本の最盛期とされる寛文・延宝頃には、奈良絵本や絵巻を商品として扱った絵屋・絵草紙屋によって、料紙や挿絵に贅を尽くした作品も数多く残されている。これらの豪華本は、大名家などから注文を受けて制作されたものと考えられる。本書で紹介する『絵入太平記』も、旧熊本藩主細川家伝来の美術品を収める永青文庫に所蔵されており、大名家における軍記物語享受を考える上でも重要な作品である。

さて、『太平記』の絵画化作品としては絵巻や絵入り版本、屏風などがあるが、奈良絵本としては本作が現在知られる唯一のものである。『太平記』のほとんどの章段を絵画化したという本作は、他の絵画化作品にはない場面を多数有している点が特徴である。また、詞書が省

略・梗概化され補助的に副えられる絵巻とは異なり、『絵入太平記』は長大な『太平記』の詞書全文を省略することなく収録している点も注目される。そのため全体の冊数は八三帖、総挿絵点数は八〇〇枚近くにも及ぶ大部の作品となっている。

本書は、影印篇と研究篇の二冊に分けられている。本書の魅力としてまず挙げられるのは、影印篇において『絵入太平記』の挿絵すべてをカラー図版で掲載するという贅沢な構成であろう。なかでも見開き絵の多さ、書き込まれる人物の多さには目を見張るものがあり、挿絵の細部を眺めるだけでも十分に楽しめる。

さらに研究篇によって、読者は『絵入太平記』の世界をより深く理解することができる。研究篇は「『太平記』梗概 附…『絵入太平記』挿絵簡注」、「『解説』」、「『絵入太平記』挿絵当該章段一覽表」からなる。「『太平記』梗概 附…『絵入太平記』挿絵簡注」では、『絵入太平記』をもとに全段の梗概を示した上で、対応する挿絵の場面解説が加えられており、この研究篇を傍らに影印篇の挿絵を眺めれば、『絵入太平記』の全容がうかがえる構成となっている。続く「解説」では、『太平記』研究者である森田貴之氏による詳細な検討が加えられている。森田氏は、『絵入太平記』の基本情報や制作環境を示しつつ、他本

との挿絵比較から、同時期の絵画化作品における位置づけや『絵入太平記』独自の特質を論じている。そして最後に、『絵入太平記』を軸に主要版本、『太平記絵巻』の挿絵場面の有無と枚数をまとめた「『絵入太平記』挿絵当該章段一覽表」を付す。

江戸時代前期の絵草紙屋で新たに制作された物語には、『太平記』の説話を利用しているものが少なくない。『絵入太平記』は、中世軍記物語の近世的受容という観点のみならず、絵草紙屋における『太平記』享受の点からも注目される作品である。『絵入太平記』の挿絵を丹念に分析・紹介する本書は、奈良絵本・絵巻研究が進展するための基盤となる一冊であろう。

二〇二三年三月二五日刊、勉誠出版、B5判、

六五六頁、五〇〇〇円＋税

（末松美咲・名古屋学院大学講師）

木俣元一・近本謙介編

『宗教遺産テクスト学の創成』

本書は、「宗教遺産テクスト学」という新たな学術領域の創成に向けての出発点であると同時に、それぞれ高度な専門性を有する領域・分野を横断する共同研究の第一次成果報告でもある。「宗教遺産テクスト学」とは、「宗教遺産」という概念を新たに提案することにより、従来さまざまな専門分野で個別に研究されてきた人類のあらゆる宗教の所産を、多様な「記号」によって織りなされたテクストとみなすことで、その構造と機能を統合的に解明し、人類知として再定義することを目的とする新たな文理融合型の学術領域である。本書は、三篇七部をもって構成される。以下、内容を紹介する。

第一篇「生成・動態の解明」

第一篇は、仏教の宗教遺産が各地で生成・伝播・交流・集積を繰り返すメカニズムとその実態を、具体的な事例をもとに明らかにする。

第一部「源流と伝播のメカニズム―仏教文献・図像の源流および諸地域への伝播の解明」は、アジア全域に伝播した仏教美術を汎アジア的視野から包括的にとらえ、

その成立・受容・変容のメカニズムを明らかにする。第二部「交流と集積の実態解明―東アジアにおける祈りの記録と記憶」は、仏教東漸の過程に形成された宗教遺産の交流と集積の実態を、法会と信仰空間の復元的分析を含めて多面的に解明する。第三部「日本における宗教美術の形成・伝来・復元」は、日本の宗教美術が靈性を帯びるメカニズムを歴史的・社会的な背景を踏まえて探求する。更に、宗教美術の制作・利用の実態を分析し、社会における継承・活用の理論と方法について提言する。

第二篇「多様性・多声性の解明」

第二篇は、事例調査に基づき、「宗教」や「宗教遺産」概念について、多様性・多声性・普遍性・歴史性・社会性についての分析を踏まえた理論構築である。

第四部「文化遺産」と「宗教」の歴史と理論―「宗教遺産テクスト学」の基盤構築に向けて―は、「宗教遺産テクスト学」の前提となる学術的基盤の構築および汎宗教的展開と普遍化のための理論を整備する。第五部「宗教実践の多様性と遺産化をめぐる諸問題」は、人類社会において「宗教遺産」の理念とあり方の多様性と普遍性について探求すると同時に、アーカイヴの活用のための実践研究を行う。

第三篇「文理融合による新展開と未来への発信」

第三篇は、最先端の科学技術を活用することで、文理融合型研究への展開を実現する。更に、先端的なアーカイヴ構築を行い、研究成果を発信するためのプラットフォームを整備する。

第六部「文理融合型研究の新展開構築」は、各部に示される各々の研究を推進する際の科学技術の有効かつ積極的な活用方法を確立する。第七部「宗教遺産先端アーカイヴ構築と発信」は、最新のデジタルヒューマニティーズを駆使した先端的なアーカイヴ構築とプラットフォームを通じた学界・社会への発信方法を探求する。

（二〇二二年三月三十日刊、勉誠出版、B5判、七二八頁、

一五〇〇〇円＋税）

（郭佳寧・名古屋大学研究員）

怪異怪談研究会監修、一柳廣孝・大道晴香編著 『怪異と遊ぶ』

本書は、『怪異の表象空間』（国書刊行会、二〇二〇年）などの怪異に関する論考を多く著している一柳廣孝氏が、大道晴香氏や怪異怪談研究会のメンバーたちと著した新著である。本書を刊行した青弓社からは既に『怪異』とナシヨナリズム』（二〇二一年）なども出ているが、今度のテーマは「遊び」である。

「怖いもの見たさ」という言葉で端的に表されるような、怪異に対する好奇心というものを、私たち人間は持っている。恐れながらも、怪異を楽しみ戯れる。「一見アンビバレントにみえる、そんな怪異と人間との関わりに光を当てて」（一四頁）ために本書の筆者たちが採用した視点が「遊び」であったのだ。これまで私たちは、「自ら能動的に怪異を作り出す」（同頁）という仕方では怪異と戯れて（遊んで）きた。その一方で、遊びというものは、「あちらの世界」と「こちらの世界」とをつなぐ回路の役割」（同頁）を果たすものでもあった。であるならば、「あちらの世界」と「こちらの世界」との交錯する場に現れる怪異に対する私たちの関わりは、本質的に

遊びの要素を含むものであったのだ。その意味で、遊びについて考えることは、怪異研究の本流であると言える。

本書は三部構成となっている。第1部「怪異を語る」は、「皿屋敷」や狸合戦など、落語や講談や地域の伝承などの物語を分析した四つの章によって構成されている。第2部「怪異を表現する」は、近代の小説や漫画、大正時代の奇術・心霊術において表象される怪異の問題について採りあげた三つの章によって構成されている。第3部「怪異を操る」は、「こっくりさん」やホラーゲーム、地域社会での怪異の親しみなどにおいて、私たちが怪異の出現に参加するプレイヤーとなる可能性について論じた三つの章によって構成されている。そして最後に、作家の川奈まり子氏を囲んだ特別座談会「怪異を創る楽しみ」（川奈まり子／一柳廣孝／大道晴香）が収録されている。

注目したいのは、第4章「意味が分かると怖い話」とは何か（永島大輝）である。「意味恐」と呼ばれる「話群」がネットから広まり、児童書や漫画などを通じて若い人に親しまれ、次々と生成される状況が論じられている。「意味怖」については「ほとんど研究されず、特に定義もされないまま放置されてきた」（八四頁）ような

ので、これを機に研究が進むと良いだろう。

本書の筆者たちは「遊び」という語の意味を柔軟に捉えて各々の議論を行っているが、ヨハン・ホイジンガやロジェ・カイヨワらの議論を援用している者もいる。今日のゲーム研究などとも接続しながら、怪異研究や文学研究がさらに発展していくことが期待される。

〈二〇二二年四月二七日刊、青弓社、四六判、二九六頁、

二四〇〇円＋税〉

（広瀬正浩・梶山女学園大学教授）

近本謙介編

『ことば・ほとけ・図像の交響』

法会・儀礼とアーカイヴ』

二〇一〇年の秋、ロンドン大学において、編者がSO

ASのルチア・ドルチェ教授と共催した学術研究集会「ことば・ほとけ・図像―中世宗教のかたち」が行われ、筆者も参加して総括報告を行った。それを元に、拙著『中世日本の宗教テキスト体系』最終章「中世宗教テキストのゆくえ」が書かれ、それは、筆者にとっても自らの中世宗教テキストの全体像を通時的かつ共時的に見わたす為の契機となった。こうした訳で、筆者には、この、ロンドンでの学会の課題を継承しながら、新たに再編し、より充実した論集の刊行は永く待望されるところであった。それは、全て新稿の論文から成り、更に多数の寄稿者を得て充実した大冊となった。その意味で本書は、まさしく二〇二二年の現在にふさわしい、人文学の挑戦的な問題提起を企図した論文集であるといえよう。加えて、これが、名古屋大学人文学研究科に設置される人類文化遺産テキスト学研究センター（CHT）において、その国際的なテキスト学の拠点に、図像と儀礼の位相を

も領域とする、アーカイヴスを対象として構築に取り組む活動の研究成果として刊行されることも、意義に叶った出版であろう（また、同時に、木俣元一・近本謙介編『宗教遺産テキスト学の創成』も刊行され、より具体的かつ方法的に人文学諸分野を連携・融合させるべく、新たな学術領域の創成を積極的に提案している）。

本書の企図理念は、冒頭の序説に示される、人類の祈りのすがたとして営まれた儀礼を、ことば・ほとけ（聖なるもの）・図像^{イメー}の諸位相の統合のかたちとして捉える、テキスト学の認識にもとづき、その様態をあざやかに示す日本中世宗教の世界を中心に、その所産である各種アーカイヴスの探査成果のうえに見ようと試みるものである。その各分野の専門研究者の、とくに若手・中堅が集結し、各自の最も先端で実験的な探究の成果が、一堂に会して披露されることになった。

二十三篇の論考から成る本書は、四部に分かたれて構成される。第一部「ことばの響き」は、中世の唱導に関する筆者の論文に始まり、春日・南都の神仏儀礼についての編者の論文で総括される。第二部「ほとけの響き」は、富島義幸の重源による浄土寺浄土堂の建築空間に関する論攷から始まり、大谷由香の中世南都の戒律復興の僧伽空間成立に関する論で纏める。第三部「図像の響き」

は、泉武夫の密教と浄土教の図像造型の特質を可視化する論に始まり、高橋悠介の密教聖教伝授・書写に関する報告で結ばれる。第四部「アーカイヴとの共鳴」は、松尾恒一の東アジア宗教儀礼の流通を通観する展望から、程永超により朝鮮国と明帝国の外交史上の新資料が紹介される。各篇は、その執筆者にとつて、それぞれの中心的な研究課題やその対象について、探究の一環として進展を示す重要な論攷であると同時に、本書においては、他の論文と共鳴し響き合う、編者による絶妙な布置によって、相互に生かしあっている。

全ての論文を取り上げるとは紙幅の制約上叶わないが、ここでは特に注目される、本書が掲げた「ことば・ほとけ・図像」および儀礼とアーカイヴの相関において（仏法でいえば、三宝（仏・法・僧）や三密（身・口・意）に相応する）、その趣意に呼応し、かつ独自の創見を提示してみせた論に言及しよう。その範疇外ではあるが、筆者の論は、かつて編者がリュブリアナで催した「ことばとほとけ」東西の唱導と説教を巡る学会で基調講演を勤めた際の際の原稿を元に、唱導の文化遺産をアーカイヴスの視点から捉えようと試みた。本書の山野論文は、この中世唱導のアーカイヴの典型といふべき安居院『転法輪鈔』の最古写本である歴博蔵本（この田中教忠旧蔵本に

ついては、筆者と松尾恒一による歴博共同研究によって、本書の執筆者数名も加わった解説・翻刻によって公刊紹介した）を活用し、その幾つかの法会が創設期鎌倉幕府の主體的な儀礼空間の創出であることを明らかにしており、こうした宗教アーカイヴの基盤的文獻研究が如何に大きな成果をもたらすかを如実に示した論文であった。また、近本論文は、今も生き続ける春日若宮おん祭の儀礼と芸能が、嘗ては一体であった興福寺の中心的国家法会であった維摩会およびその延年芸能と緊密に連動した祭礼であった消息を、この寺社世界の記念碑的図像テクストである『春日権現験記』の解釈から指摘する。

阿部美香論文は、東寺西院御影堂に宣陽門院が創始した舍利講に、貞慶の『舍利講式』が用いられたことに注目し、その解説を通じて儀礼テクストに託された女院を主体とする中世密教宗教空間の意義の拡張を捉える。これは、郭佳寧論文の、覚鑊による高野山大伝法院の宗教空間の創造を、儀礼を中心とする各種宗教テクストの解説を通して多角的に復元する試みと呼応しており、それ自体にアーカイヴを内蔵する中世真言寺院の宗教空間の復原は、それが顕密一体となつて生成・融即する世界であった実態を示すのである。これは、富島義幸論文の重源が果たした浄土堂の迎講のための独創的な儀礼空間の

創出にも共通して指摘される特質であり、また、泉論文が取り上げた宝珠宮の請雨法儀礼と重なる図像学的特色や、更に提示される山越阿弥陀図における白毫光の儀礼上の投射機能への論及などに示唆される、密教と浄土教造型の儀礼的地平での重なりなど、顕密仏教芸術の連続的な複合の在り方を計らずも照らし出すところであった。

加えて、西谷論文の『法然上人絵伝』（四十八巻伝）の北条時頼往生場面への解釈において戒律儀礼の介在を提起し、その背景に俊苒門下と法然門下の徒の交流を指摘することは、中世諸権門と仏教各宗との関係が、もはや単一の宗派や信仰に還元することを許さない状況であった消息を端的に示している。これに、大谷論文の南都戒律復興にあたり、四分律の枠組では突破し得ぬ障壁を寛盛が大乗菩薩戒儀と解釈に依拠することで乗りこえるという指摘も呼応して、現在の、中世仏教の景観が大きく変貌しつつあることを如実に物語っている。

一方、密教聖教とその図像テキストに関しては、海野論文、ラポー論文、高橋論文において、新たなテキストが紹介され、位置付けられるが、これらが共に、たとえば文観の著作に比定される『御遺告七箇秘決』の如く、秘事説として時に異端・邪義視されるようなテキストでありながら、中世寺院の密教聖教アーカイヴの裡に蔵さ

れ、伝えられていた現象に注意が牽かれる。

以上の論文は現在、学界の流行^{トビレ}となった寺院資料アーカイヴ調査の成果の一端を成すものだが、それらと一線を画するのが、松山由布子論文の地域民間宗教者の伝承した、彼らの宗教実践の為の宗教テキストの探査とそのアーカイヴス化の報告である。奥三河の「花祭」を伝える太夫「称宜」の蔵書の悉皆調査（この作業は、名古屋大学CHTによる宗教テキスト遺産アーカイヴス探査の、筆者を代表とする科研（S）によるものであった）により分析が可能となった、その形成者でもある修験万蔵院のテキスト体系が、諸家に分れる蔵書群の横断的な目録化により浮かび上がる。それら各テキストの解説の蓄積と、その宗教テキストの普遍的な分析解釈は、全ての論文に共通する永続的な課題となるだろうが、それは、一点、一箇処、一領域に限定せず、（海外も含めて）全国各地の寺社・民間の汎ゆるレヴェルとアーカイヴスで進められ、交流・共有されるべきだろう。目下、その端緒となる活動を筆者も三菱財団の人文研究助成「地域と連携する宗教文化遺産のアーカイヴス化による社会創成」により試みているが、それを単独の活動でなく、連携、結合し、総合して相互に情報と方法を共有・活用する共同体的な仕組みが必要ではないか。それはまた、本

書が見事に包摂してみせた人文諸学の各分野と研究者の間でも、あらためて意識的に再構築する必要があるだろう。そして、更にそれらの既成の枠組パラダイムを超えたところを目指す学術の革新を希うところであり、その可能性が決して空しい夢想でないことを、本書は雄弁に物語っている。

二〇二二年三月三十一日刊、勉強出版、B5判、五五四頁、

一二〇〇〇円＋税

（阿部泰郎・龍谷大学教授・名古屋大学高等研究院客員教授）